

サ ー ン チ ー 第 二 塔 — 記 述 と 解 釈 (二)

山 本 智 教

SW 16 — 内面 (逸見二二七図右より第二柱) の上は三叉の上に

何本かのれんげが叢生する。中は小さい開れんげを中心に六個の小さい開れんげをめぐらし、中間にれんげ側面図を配する。下はれんげの半分。外面は上中下みな開いたれんげ。

W 1 — 東面の上は満瓶れんげ、中と下は共に開いたれんげ。西面も上中下みな開いたれんげで、この面は甚しくいたむ。

W 2 — 東面の上は満瓶れんげ。中は小さい開れんげを中心とし、四個の三叉とれんげ側面図をめぐらす。下は開れんげの半分。西面は上中下とも開いたれんげ。

W 3 — 西面の上はパルメットとれんげ側面図。中は開れんげを中心に十字文とれんげ側面図をめぐらす。下はれんげの半分。北面の上下とも開れんげの半分。中は開れんげとれん

げ側面図。

W 4 — 南面 (逸見二二五図左) 上は開れんげを挟んでれんげ側面図とつばみをおき、中は叢生するれんげの中に象が佇む。下は開れんげの半分。北面の上は満瓶れんげ、中はれんげのつばみを正面から見た所、下は開れんげの半分。

W 5 — 南面 (逸見二二五図手前の柱の左側面、尾高八七一図)

この柱のは南入口の相当位置の柱 (S 5) と酷似する彫刻をもっている。即ち W 5 南面は S 5 東面に、W 5 東面は S 5 北面に夫々酷似しているので、同一作者の手になつたのであるかと思える。W 5 南面が S 5 東面と異なる点は下部に二段になつたパルメット文があつて獅子や鹿がいないこと、大地女神に灌水する両象のうち右の象の上に日傘が立てられること、男女像が (図 17) 左右ふり変つてゐることである。彫はあさ



図18 W 5東面下部 象が吐く蓮花

W 5東面はS 5北面にも又W 6西面にも酷似するれんげ蔓
円輪文である。
S 5北面の一番
下に見える小ヤ
クシャの代りに
ここには魚尾を
有つ象がいて、
れんげ蔓はその
口から生い茂

一番上には欄楯にかこまれた菩提樹をあらわす。これは礼
拝の対象たる聖樹であつて、おそらくブツダガヤの菩提樹で
あるう。もしそうとすれば、それは仏の成道を象徴すると見
られる。菩提樹の下には男女像、更に下に三対の鳥が左右に
一対ずつ並ぶ。一番下に駱駝にのる人をあらわす。
W 6東面（逸見一二七図右端）
一番下にパルメットがあつてこれにれんげをあしらう。そ
の上に上下二段に二対の牡牛が背を合わせて跳躍する。この
意匠の上には法輪柱がある（図19）。その根元は欄楯にかこ

W 5東面（逸見一二五図手前の柱の右側面）

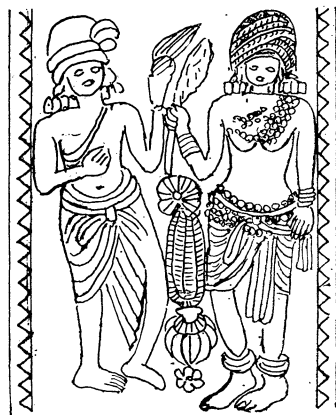


図17 W 4南面中部 男女像

いがこの面の彫
像はゆつたりと
画面一ぱいにと
つてある。但し
足のあらわし方
などよく似てい
る。女性像の頭
飾の刺繍をこま
かくあらわす。

り、（図18）五つの輪をなす。輪の中に開れんげ、つぼみ、れ
んげ側面図を並べ、輪と輪の中間の左右に獅子などの動物を
配する。
W 6西面
W 5東面に似ているが小異はある。一番下は象であるが最
上には男女立像があり、円輪間の左右には鳥が餌をあさるの
をあらわす。男女共下から生え上つたれんげの茎を右手にも
つ。顔も体も正面をむきひらたくて肉附はあらわさず、足を
横にするのはこの塔で既に見た手法である。

W 6北面

まれ、柱身は円く、柱身の下部に銘文がある。柱頭に花弁、索条文、連玉文、方形冠盤があつて、その上に象四頭がのるが、実際は三頭しか見えない。象は十六幅の法輪をいただく。法輪と柱頭の左右にけまんが垂れる。この柱は全くアシンメトリカ石柱の形式であつて、インドに行なわれた柱のなかではむしろ特異な型である。この法輪柱は釈尊の初転法輪をあらわすと考えられる。柱の右に男、左に女が一人ずつ立つ。男は合掌し、女はれんげを捧げる。この様な法輪柱はS6北面、N3北面、N5西面にも認められる。

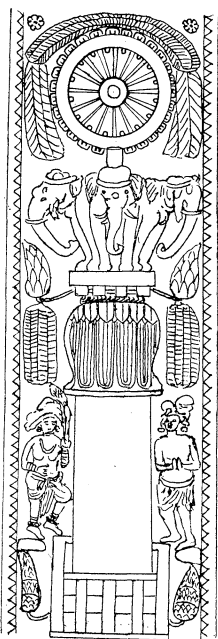


図19 W6東面上部 法輪柱

WN1——内面（逸見一三五図左端）の上はれんげが叢生する中に嘴のある獅子（馬に似ている）が蹲る。中（図20）は開れんげに二つの小さい開れんげを添え、これを背景として象にのる人をあらわす。象も人も正面を向いている。この場合に



図20 WN1内面中部 乗象者



図21 WN2内面中部 蓮花の精

人物を正面からうつす事は容易であつたが、象は普通側面向きにうつし慣れているが、正面向きでは四本の脚全部を見せ

たために、それより幅広い腹部を示そうとして、結局非常にふくれ上つた怪物をつくつてしまつた。W6東面の柱上の正面向きの象は前脚二本を見せるだけであるから自然であつた。下は三重輪の開れんげの半分。外面の上は三叉にれんげの側面図、中は開れんげを中心として三叉四個を配し、まわりに連珠文をめぐらす。下は半分のれんげ。

WN2——内面（逸見一三五図中）の上は中心に小さい開れんげがあり、左右から鳥が向い合い、大きなけまんをくわえる。けまんは半メダイオンを蔽う様にひろがる。中（図21）は片膝を立ててしやがむ男性の精（ヤクシャ）が臍かられんげ

の茎を出す。それが二つに分岐したものを彼は両手に握る。

それが上で各々幾本かに分れ花やつぼみや葉をつけ、メダイヨンの空所をうづめる。これはE1北面などに見るのと同じ地中の精である。大きなターバン、装身具、ドホーティーをつける。古代インド彫像の特色の一たる大きな眼が認められる。下は二重輪開れんげの半分。外面は上に開れんげとれんげ側面図、中に開れんげ中の双鳥、下に蓮花のつぼみをあらわす。

WN 3 — 内面（逸見一三五図右端）上は正面を向いて坐する人物が両手にアームラの枝をもつ。豊饒の精か。中は翼を有する人物が馬にのる。馬の前に別の人物が立つ。下は半分のれんげ。外面の上は獅子とれんげの側面図、中は満瓶れんげ、下は半分のれんげ。

WN 4 — 内面の上は開れんげを背景とし大きな三叉の両脇に小さい開れんげ二個を添える。中（図22）は開れんげを背景として象にのる人二人をあらわす。その頭飾、耳飾、大きな眼はみな古代インド式である。下は開れんげ。外面の上は叢生するれんげの中に一人物が坐す。これもれんげの精であるう。中は有翼獅子を正面から見て失敗している。というのは

獅子は側面をあらわすのに慣れているから。下は半分のれんげ。



図22WN 4 内面中部 乗象二人物



図23WN 6 外面中部 蓮花と有翼獅子

WN 5 — 内面の上下共にふつうの開れんげの半分。中は双象に灌水せられる大地女神の図で、前にS5東面に見たものと同じである。外面の上はれんげ側面図とパルメット（?）、中は象にのる人物、下は開れんげ。

WN 6 — 内面の頂上に銘文を刻する。上にはパルメットと開れんげ、その左右のれんげ側面図に二羽の鳥がとまる。中に象があつて、一本のれんげ蔓草が之をとりまく。下に半分のれんげ。外面の上はれんげ側面図、中（図23）はれんげが左右相称に生い茂る中に一對の有翼獅子が外に向つて跳ぶ。下

は半分のれんげ。

WN 7 — 内外面とも全部開れんげ又は蓮花側面図。

WN 8 — 内面（逸見一四〇図左端）の上はれんげの側面図とけまん。中はWN 6外面中部とよく似た生い茂るれんげの中に左右にとび上る一對の有翼獅子。下はマカラにれんげを配する。外面の上は叢がり生え出でるれんげ。中は開れんげを連珠文でとりまく。下はパルメットにれんげの側面図を添える。

WN 9 — 内面（逸見一四〇図中）の上は半分のれんげに三羽の鳥とけまんを配する。中は花咲く木の下を象にのつて行く男。下は半分のれんげ。外面の上は開れんげとれんげ側面図。中は開れんげとその周縁をなす連珠文。下は開れんげ。

WN 10 — 内面の柱の上の笠石の部分に銘文を刻する。内面（逸見一四〇図右端）上は生いしげる幾本かのれんげ。中（図

24、尾高八七六図）体は馬、頭は女の上半身になっている怪物に男が体はまたがつて進む。丁度男女は並んでいる様である。これは女の体に馬の頭がついた怪物 *Assamukhi* と反対の構成であつて、何というものか知らない。（NE 2には馬身に男身がついたものに女がのるものがある。）奇獣は手にけまんと



図24 WN10内面中部 馬身女身の奇獣



図25 WN13外面上部 有翼飛天

もつから、やはり仏塔供養の意を現わすのか。間地に小さい開れんげをおく。下は半分の開れんげ。外面の上はれんげが叢がり茂る様をあらわす。中はれんげがおい茂る中に五頭龍があり、左右に各一人物がある。下に半分のれんげ。

WN 11 — 内面の上はれんげの側面図。中は小さい開れんげのまわりに四つの三叉をおき、周縁に連珠文をめぐる。下は半分のれんげ。上と中の間にれんげ上に立つ男性像、中と下との間にれんげをもつてれんげ上に立つ女性像がある。外面の上はれんげの叢がり茂る様、中は獅子(?)の頭部をもつ馬に刀をもつ男性人物がのる。その背景にれんげが叢がり茂る。下は半分のれんげ。

WN 12 — 内面の上は開れんげに三叉とれんげ 側面図を配する。中は満瓶れんげ、下は開れんげと三叉。外面の上は再び満瓶れんげ。中は小さい開れんげに三叉四個をめぐらし、連珠文で縁どる。下は満瓶れんげ。

WN 13 — 内面（逸見一四一図左）頂上に銘文がある。上（尾高八七四図左）は角の生えた象が走る様をあらわす。但し脚は馬脚らしい。中は開れんげを背景として乗馬男性人物をあらわす。下はれんげの側面図。外面の上（図25）は両手でけまんをもつて飛ぶ男性の飛天。その両脚の後に尾翼がついている。間地に花をおく。飛天図としてはN5南面のものと共に仏教で最も古い部類に属する。これに比較出来るのはオリッサのウダヤギリにあるジナ教の飛天やバルハットの仏教の飛天である。中は鶴二羽とれんげ側面図。下は半分のれんげ。

WN 14 — 内面（逸見一三九図左、一四一図右、尾高八七四図右）上はれんげ蔓をくわえて疾走する象。中は双象に灌水せられる大地女神。その両足が正面を向くのは珍らしい。下は半分のれんげ。外面の上は叢がり生えるれんげ。中はいくつかのれんげのつばみを背景として男性人物。頭を右に傾けて、右脚をまげ、左腕を下げ、右腕を曲げて前腕を頭につける。下

は半分の開れんげ。

WN 15 — 内面（逸見一三七図左、一三九図右）上は三重輪開れんげの半分。そこに赤色の痕跡がのこる。ここで私はサーンチー大塔の地上の欄楯にも赤色の塗料がのこっているの思い出す。それから類推して、これらの欄楯にはもと赤い彩色を施してあつたと見てよい。中（図26尾高八八〇図）はれんげのつばみが四つ生えている所を馬の首を有する女性が男子をかかえて行く。そのドホーティーは平行な垂直の陰刻線でひだを示す。何も装身具をしないのはヤクシーであるからであろう。女が男を抱える方法は今日のインド婦人が子供を



図26 WN15内面中部 馬面ヤクシー



図27

WN15外面中部 家から出る乗象者

抱えるのと同じで、女は男を自分の腰に股がらせ、男の腰を

かかえるのである。女も男も枝つきのアームラ果をもっている。この図は *Padakusalamānava Jātaka* (No.432) に出る *Assamukhi* を想わせる。下はマカラ。外面の上は猪と鳥(?)、中(図27)は象にのつた人が家から出る所をあらわす。家は木造らしく、屋根は傾斜している。棟の上に柱の先が突き抜けて出ている。下は向い合ふ二羽の鳥。

WN 16 — 内面(逸見一三七図右) 頂上に銘文を刻する。上は小さい開れんげを挟んで左右に魚形の花房とれんげ側面図を配す。中(尾高八七七図)は小さい開れんげを中心に四つの三叉をめぐらし、空き間に小花文八個をおき、外周にけまんをめぐらす。下は開れんげの半メダイオン。外面の上はパルメットに三叉を配し、あき間に獅子二頭を入れる。中は開れんげに小さい開れんげをめぐらす。下はパルメットれんげ文。

N 1 西面 (図28)

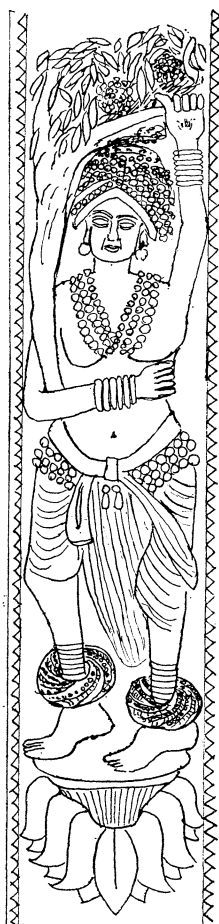


図28 N 1 西面
樹下ヤクシー

N 1 は北の入口にあり。そこに全面的に彫刻を施す。下にパルメットが生え、れんげ台がある。その上に大きな樹下ヤクシーが立つ。E 1 西面にも樹下ヤクシーはあつたが、このはあれよりも大きい。バルハットの欄楯には樹下ヤクシーがいくつか知られているが、サンチー第二塔ではやや大きい女性像はこれだけであるから、特に貴重である。この像も正面向きであるが、両足は横に(右に)向けている。そして足先で立ち背のびしている。彼女の右側に樹木があり、彼女は右腕を幹にまきつけ、左腕を上げて上の枝を手で握る。樹下ヤクシーのポーズとして普通のもの (*śalabhajika*) である。装身具は刺繍のある被りもの、胸飾、腕環、腰飾、足環二種である。頭飾は男子のターバンの様に大きな二つの瘤のあるものでなく、何らの突起もない。ドホーティーは極めてうすく、そのひだは細くてあさい陰刻平行曲線をもつてあらわす。顔面で眉が隆起し、眼大きく、鼻から口角にかけて溝がある。白眼の部分は盛り上げていたらしい。バルハット彫刻の眼と同様であるが、すこしい



図29 N1 南面 法輪崇拝

たんでいる。頬はふくれているが、後のマトウラのヤクシーの様な豊かさはなく、バルハットと同様にかたい。メダイヨンの小さい浮彫に比べると彫り方は深いけれども、顔でも胸でも尚充分な丸味と肉附をもたない。この像とバルハットの彫像と比較するだけでも、サーンチー第二塔欄楯とバルハット欄楯がほぼ同じ時代であることが知れる。即ちその服飾、衣のひだ、身のこなし、体の肉附などのすべてがそれを示す。

N1 南面（図29、逸見一三八図左、尾高八六九図）

上に十六輻の法輪が三叉上に安置され、三叉は開れんげの上にのる。開れんげの両側にれんげの側面図がある。法輪からけまんがぶら下つている。以上の全体が方形の台の上にのる。台の縁に四瓣花文列がある。この台を二人のヤクシャが両手と頭でさし上げている。この様な重荷を支えるヤクシャ

は広く古代において行なわれ、又近代までもつついている。インドにこの種のヤクシャが多いが、中国で侏儒というものも同じ様なものである。両ヤクシャの足は正面を向いている。両ヤクシャの中間に小さい人物が合掌する。その下には男女が各々けまんをささげる態をなす。この法輪は仏の転法輪をあらわし、男女は仏にけまんを捧げるのである。男女の間に小さい女が向う向いて坐する。最下には一頭の鹿を争う二頭の獅子をあらわす。この様な主題は仏教に背くものであるが、当時世間で行なわれていたので、場所塞ぎにここにおいたまでで特別の意味はないであろう。

N1 北面

最上には双象が灌水する大地女神像。次の男女立像は正面向きで足は横に向ける。下は象にのる二人の人物と象に踏み倒される一人の男をあらわす。象鉤がはつきり見える。

N2——南面（逸見一三八図右）の上は開れんげにれんげ側面を配する。中は小さい開れんげを中心に蛇頭の如きものが四方に出て、そ

の中間にれんげの側面図をあらわす。下は開れんげの半分。北面はE1東面に似てれんげ文様の中に男性像が立つ。

N3——北面（尾高八七二図）の上部に法輪柱、下部にパルメット文がある。法輪柱はW6の東面のものに似ているが、少しちがう。即ちここでは動物は象でなくて獅子であり、柱身は円形でなく八角の三面をあらわす。法輪をかざるけまんや柱の左右に立つ男女像は同じである。この女性像の足が正面に向けられているのはサーンチー第二塔ではめずらしい。法輪柱の下はパルメットにれんげ、跳び上る獅子を配する。東面は象がくわえるれんげが上にのびて生い茂る上に女性像が立つ。

N4——この柱は両面とも上中下の三メダイオンをもつ。西面の上は開れんげとれんげ側面図、中は開れんげの周りに連珠文をめぐらす。下は開れんげの半分。東面の上は開れんげを背景として双獅子。中は象が鼻を巻き上げ、いく本かのれんげをくわえる。下は半分の開れんげ。

N5 西面（尾高八七〇図）

上半分が法輪柱、下半分がれんげと双獅子および双鹿である。この法輪柱は柱頭に獅子がのり、柱の左右に男女像がな

くて開れんげ列をならべる。柱身は八角である。下半分は水瓶より生え出でる蓮花を中心に下に双鹿、上に双獅子が背を向けて左右に跳躍する姿を示す。

N5 南面（逸見一三六図左）

上下二つの図相で全面を蔽う。上（図30）は菩提樹、下はれんげ蔓草である。菩提樹は欄楯にかこまれ、枝にけまんが吊され、傘が上に立てられ傘、の左右に飛天がある。飛天はけまんを両手にもつて合掌する。それは斜前向きにあらわされ肩と後に翼がついている。らんじゆんの下に台があり、その台を二人のヤクシャが頭と両手でさし上げる。下の図は一番下に魚があつてれんげの茎をくわえ、その茎が上にのびて数本になり又彎曲する。それに花やつばみや葉の外にけまんが

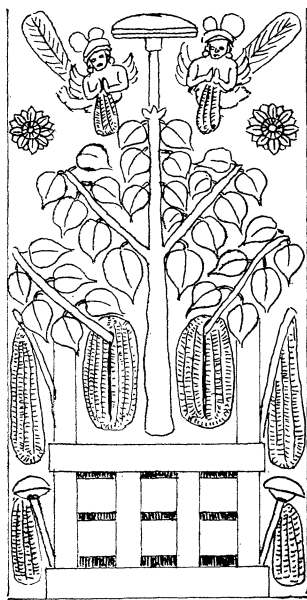


図30 N5 南面 菩提樹

吊される。魚の上に象がいて、鼻をまき上げて蓮茎をつかむ。

N 6 北面——これも豊饒のれんげ蔓草である。W 5 東面に見る様なれんげ蔓草が彎曲して円輪形をつくるものである。一番下にマカラがあり、それが蓮花の茎をくわえる。茎が上のびて五つの円輪をつくり、円輪内に花や葉をつけ、又中間に花房や宝玉環が吊される。中央部の円内に一人の精が蓮花台の上にしやがみ、蓮茎を両手に握る。

N 6 東面——上部は破損し、その次がパルメット文、次が三叉でけまんがこれにかかっている。次が女性立像、最下に三頭の獣をおく。

N 6 南面（逸見一三三図）——インド人が胸飾につかう連珠や花文によつて全面を上下四区に区劃する。最上区に男女並立像。足はやはり横向きにあらわすか又は横向きにしたまま爪先を立てている。後の場合は正面向きにあらわすつもりであろう。両像のあき間にけまんをつるす。第二区も男女立像。男は左手に幅の広い剣をもつ。双刃であろうが鞘におさまっている。両人の中間に水瓶をおき、あき間には花文を配する。第三区（図31）は短剣と盾をもつて獅子と戦う人をあらわす。そのスカートのひだはかなり柔軟に扱われているが、



図31 N 6 南面第3区
獅子とたたかう人

たもの。この柱の笠石に銘文を刻する。

NE 1——内面（逸見一三六図右）の頂上に銘がある。上は生いしげるれんげの側面図。それに二羽の鳥がとまる。中のメダイオン（図32）の上にはれんげの側面図があり、大部分はどくろを巻く四匹の蛇に囲まれる一人の人物をあらわす。人物の頭飾の上に五つのコブラの頭が並んでいるから、この人物そのものがナーガであると見なければならぬ。蛇身は四本しか見えないが五頭龍王である。ふつう龍王は人間の風をしてその頭の上にコブラの頭をつけるか、或いは蛇身だけの場合もあるが、この様に人身と蛇頭の他に蛇身をあらわす例は珍らしい。下部はふつうの開れんげの半分である。外面の上

獅子も人間も運動性を欠く。しかも間地に花文やけまんを配して、気分は少しも悽慘でない。第四区はパルメットを二つ重ね

は叢生するれんげを背景として象が走る。中はれんげ側面図を背景として男性像が立つ。正面を向き脚を少し折りまげ足を横に示す。下は開れんげの半分。



図32 NE 1 内面中部 五頭龍



図33 NE 5 内面中部 孔雀

NE 2 — 内面の上はれんげ側面図。中（尾高八七五図）は内面に見える様な人身に馬身がついたものであるが、ここでは前と反対に男身に馬身がついたもので、乗っているのは女性である。両方共けまんをもっている。下は開れんげ。外面の上は蔓草を背景に嘴ある獅子が蹲まる。中は満瓶れんげ。下は開れんげの半分。

NE 3 — 内面（逸見一三四図）頂上に銘文を刻す。上は象頭魚尾をもつ者。中はれんげの茎をくわえる象。下はれんげの半分。外面の上はあごひげを有する獅子とれんげ。中は鹿をく

わえる獅子とれんげ。下はパルメット文。

NE 4 — 内面（逸見一三四図、尾高八七三図）の上はれんげの側面図の中心に三叉と花房をあしらつたもの。中はパルメットの上にいくつかのけまん及び開れんげをあしらい、上に三叉をのせたもの。下は開れんげの半分。外面の上はれんげを背景として獅子が正面を向く。中は叢生するれんげの中に男性の精が立つ。下は半分のれんげ。

NE 5 — 内面（逸見一三〇図）の頂上に銘文がある。上に開れんげとれんげ側面図。中（図33、尾高八七九図）には一羽の孔雀が羽をひろげ、他に二羽いる。下は半分のれんげ。外面の上はれんげ側面図と花房。中は象とれんげ、下は半分のれんげ。

NE 6 — 内面（逸見一三〇図右）の上は二頭の牛（？）。中は開れんげの中に人頭。これもれんげの精であろう。この意匠はこの欄楯では稀だが、他の場所では屢々あらわれる。下は馬頭に角があつて魚の尻尾をつけるもの。外面の上は開れんげを中心に連珠文をめぐらす。中は乗象の二人物。下は半分のれんげ。

NE 7 — 内面の上は小さい開れんげの上に三叉がのり、左右

にれんげ側面図をおく。中は叢生するれんげ数本の中に立つ精女。下は半分のれんげ。外面は頂上に銘文があり、上下とも開れんげ。中には開れんげに連珠文をめぐらす。

NE 8——内面の上はNE 7内面上と酷似して開れんげ上の三叉とれんげ側面図である。中は八輻の法輪とそれを取りかこむ三種の首飾文。下は開れんげの半メダイオン。上と中の間と中と下の中間の中央面に夫々開れんげ・れんげ側面図とパルメット・れんげ文を配す。外面の上は三頭の獅子、中はれんげ蔓草、下は半分のれんげ。

NE 9——内面最上に銘文あり。上は鹿、中は獅子に人身のつ



図34 NE 9 外面中部
腰かける蓮花の精

いた奇獣が一頭の獣をとらえる。下は半分のれんげ。外面の上は有翼有嘴の獅子。中(図34)は竹

又は簾製の腰掛に坐する男性人物が数本

NE 10——内面の上下ともに開れんげ。中はれんげをくわえる象。外面上は満瓶蓮花、中はNE 7内面中に酷似する叢生れんげと精女。下は半分の開れんげ。

NE 11——内面の頂上に銘文を刻す。上は三叉上パルメットとれんげ。中は開れんげを背景として、れんげをくわえる象。周縁にけまん文をめぐらす。下は開れんげの半分。外面の上は開れんげとれんげ側面図。中と下は共に開れんげ。

NE 12——内面の頂上に銘文がある。上は三叉上のパルメット。中、下は開れんげ。外面の上はれんげとパルメット、中は開れんげ。外面の上はれんげとパルメット、中は満瓶れんげ。下は半分のれんげ。

NE 13——内面の頂上に銘文がある。上は開れんげとれんげ側面図。中は象がくわえる蓮花がいく本も叢がり茂る。下は半分のれんげ。外面の上は二頭の獅子の背後に蛇頭の如きものを配する。中はれんげの茎をくわえる象。下は半分のれんげ。

NE 14——内面はみな開れんげのみ。外面の上は三叉と叢がり茂るれんげ。中は小さい開れんげを中心とし、その周りにパルメットの一葉に似たものの四個と小さい開れんげ四個とをめぐらす。下は半分のれんげ。

NE 15——内面は上中下いずれも開れんげ。外面の頂上に銘文を刻し、上には開れんげとれんげの側面図、中は叢がり茂るれんげを背景として男女の嬉遊する様をあらわす。下は半分のれんげ。

NE 16——内面の上は開れんげにれんげ側面図。中は叢がり茂るれんげの中に立つ精女像。下は半分のれんげ。外面の頂上に銘文がある。上は開れんげとれんげ側面図。中は開れんげと連珠文。下は半分のれんげ。

ま と め

サンチー第二塔の欄楯はこの地の附近から切り出された砂岩でつくられ、それは彫刻に適し、又かなり堅いと見えて彫刻の細部まで非常によく保存されているのは有難いことである。南入口の三本（S1、S2、S3）だけ失なわれ、東入口の三本に西紀前一世紀後半の彫刻がある（E3北、E5西、E6東、西）以外は様式は全く一様であるのでみな同時代（西紀前二世紀中頃又はやや以前）に出来たものと思われる。

入口にある柱はその位置によつて二面又は三面に彫刻を有し、同一面では上から下まで全面的に彫刻で埋めるものなど

があるが、入口と入口の中間の柱にはその様な彫刻のほり方はみられず、きまつて内外両面に、しかも夫々の面に中央面と左右側面及び上中下のメダillonをそなえる面で統一性をもつ。又入口に6本、中間16本がそろつている点などを考えると、これらの柱の位置や順序がもとのままと考えてよいようである。ブッダガヤの欄楯の多くが失なわれ、柱の位置も元のままだどうか疑わしいのがあり、バルハットのものは多く失なわれ、博物館に移置したために尚更もとの位置は知られない様な他の遺例に比較して、サンチー第二塔の欄楯が創建当初のままに保存されてあることはまことに稀有のことで珍重すべきである。尚WN15の内面に赤色の痕跡を示すので、サンチー大塔の欄楯に見られる同様の痕跡を併せ考え、すべて欄楯の表面は赤く彩色されてあつたものと思われる。それは又石造欄楯の原型となつたそれ以前に存した木造欄楯を思わせる。

サンチー第二塔にあらわれた民間信仰

双象灌水の女神像

あらゆる生物の母としての大地と生物の生命の泉としての

水との協力が双象灌水の女神像によつて美しく象徴される。

この大地母神は史前期の極めて古くから古代世界の各地で崇拜された。この女神がここにも屢々あらわれることはその信仰の深さとひろさを物語るものである。モンスーンの雨雲を象によつてあらわしたことはインドの風土の中でとらえた極めて適切な象徴である。群をなして動く象の皮膚の色及び体のまるとい線が雨雲の色と形を連想させたのである。そこでは象は水を与えるものである。万物の生命を育てるものである。

(S 5 東、W 5 南、WN 5 内中、WN 14 内中、N 1 北上)

男性の蓮花の精

水草であるれんげは汚泥から生じて清純な花を咲かせる。

その美しさを賞でたインド人はこれを豊饒のシムボルとした。そして蓮花はサーンチー第二塔装飾の基調をなしている。その蓮花を人格化したもの、いわば豊饒の精が男性の像として叢がり茂るれんげの中に立つ。(E 1 東上、E 1 西、WN 4 外上、WN 11 内、WN 14 外中、NE 4 外中)。それに似て開蓮花文の中にあらわれる人頭も同じく豊饒の精である。(SW 8 内上、NE 6 内中)。これはバルハットやブツダガヤにも見られる。彼は又れんげの側面図を背景にして立ち(NE 1 外中、

時にはれんげを握つて腰掛る(NE 9 外中)。

女性の蓮花の精 女性の蓮花の精もかなり屢々あらわれる。

(E 3 南、E 6 東上、E 6 東中、ES 14 外中、N 6 東、WN 11 内、N 3 東、NE 7 内中、NE 10 外中、NE 16 内中)。

蓮花蔓草とその精

臍かられんげの茎を出し、その茎がのびて蔓草となつて生い茂る図がある。(E 1 北、E 6 東上、WN 2 内中)。これは蓮茎の精であるにちがいない。臍からでなく口かられんげ蔓草を吐く精の図がバルハットの欄楯にある。同類の精であらう。

蓮花蔓草の根元でその茎を握るのも同じ精であらう。(S 5 北)。以上は人間の姿をした精であるが、そうでなく蓮花蔓草を魚がくわえ(N 5 南下、ES 8 内中)、亀がくわえ、(E 1 東)、マカラがくわえる(SW 15 内中、N 6 北)のはみな水棲動物であるから、実際の観察から出たとして自然であるが、象が蓮花蔓草をくわえるのは一見甚だ奇異である。しかしそれは前述の如く水を与えるものとしての雨雲という観点に立てばよく理解出来る。Vessantara jātaṅga で太子が流されたのは自由に雨をふらせ、旱魃をすくうことが出来る国宝たる象をバラモンに布施し、農民の怒りを買つたからである。雷雨神

たるインドラが乗るのはアイラーヴタという象である。その象がれんげ蔓草をくわえる意匠は非常に多い。(E 2 東、E 3

3 外中、S 6 南、W 6 西、S W 10 内中、W N 14 内上、N 3 東、N E 3 内中、N E 10 内中、N E 11 内中、N E 13 内中、N E 13 外中、N 4 東中、N 5 南下)。鼻で巻き上げるのではなく、ただ叢生するれんげの中に立つ象も同じ意味であらう。(E 8 内中、S W 1 内中、S W 5 内中、W 5 南中、W N 6 内中)。かく見れば象に魚尾をつけるのも当然である。(E 5 内上、E 3 外中)。魚尾ある象が蓮花蔓を吐くのである。(W 5 東)。

マカラ マカラは恐らく鰐から起つたもので、水と関連するから蓮花と結びつくのは当然である。(S W 15 内中、W N 8 内下、N 6 北)。マカラは又単独に現れたり(E 3 東、S W 15 内中、W N 15 内下)、魚をのむ図もある。(E 7 外下)。

満瓶蓮花 満瓶れんげのめだたい標章はこの塔に多い。それは又古代中インド派美術の正統をうけつぐマトゥラ美術に目立っているのも興味深い。時にはその蓮花に二羽の鳥がとまっていることがある。(E 6 西、E 2 内中、E 5 内中、S E 7 内中、E S 10 内中、E S 16 内中、S W 3 外中、S W 8 内中、S W 11 内下、S W 13 外中、S W 14 外中、W 1 東上、W 2 東上、W 4 北上、W

N 3 外中、W N 12 内中、W N 12 外上、下、N 5 西、N E 2 外中、N E 10 外上、N E 12 外中)。

叢生蓮花蔓草円輪文 幾本かの蓮花が蔓草となつて生い茂げる状を写すものは非常に多いし、それにもまして開いた蓮花の俯瞰図はすべての柱に見られる程に多いので、とり立てていうまでもない。しかしれんげ蔓草が下から上へのびる際に交つていくつかの円輪を形づくるものは文様として面白い。(S 5 北、W 5 東、N 6 北)。これは柱の下から上へ全面にあらわされるので、従つて入口以外の柱に見られない。

以上と関連して豊饒の精がある。それはアームラ(マンゴ)果をもつ精(W N 3 内上)であり、又樹下ヤクシー(E 1 西、N 1 西)である。アームラの果樹はヒンドウスターン平原に到る所に見られる美味の果実であるから、古代の文献に屢々あらわれるし彫刻にも出る。その果実の先端は少しがつて尖るのが特徴である。樹下ヤクシーは森林住者たる精又は神である。男性はヤクシャ(薬叉)であり女性はやクシー(薬叉女)であり、バルハット塔の欄楯やサンチー大塔の四門に多いが、サンチー第二塔では割に少い。

仏教の象徴

れんげを中心とする生命と繁栄の信仰がかくも普遍的であった一方で釈尊の教も亦この欄楯にそのしるしをのこしている。

法輪柱 柱身上に四獅子又は四象がのり、最上に法輪をいた
だく柱が南、西、北の入口にある。(S 6 北、W 6 東、N 3 北
上、N 5 西)。そのうち二本はアショーク石柱の様に柱身が円
い。(S 6 北、W 6 東)。二本は本来のインド的な八角形の柱身
である。(N 3 北上、N 5 西)。法輪は仏の転法輪即ち説法を象
徴するものである。法輪柱でなく、三叉上に法輪を安置した
り(E 3 第1区、E 4 北上、N 1 南)又単に法輪だけをあらわす
こともある。(NE 8 内中)。

菩提樹 聖なる菩提樹は仏成道を象徴する。(W 6 北、N 5)。
菩提樹はそのハート形の葉を特徴とし、彫刻でもそれによつ
て見分け易い。菩提樹に金剛宝座を添えるものもある。(E
5 北第2区)。これは争う余地なくブツダガヤのものである。
塔婆 涅槃を標示する塔婆は古代インドの彫刻に多いが、こ
こでは僅かに一ヶ所に見える。(S 6 西)。

三叉

三叉の原意は明らかでない。三叉に似たものに二叉があ
る。古銭にしきりに出る二叉は牛の角から来たともいわれ
る。三叉が二叉から発達したとすれば、牛と関係があるかも
知れない。牛はインド古代美術に象、獅子と並んで屢々あら
われる。それは牝牛でなく牡牛である。野生の牡牛は非常に
獐猛で、獅子と互角の闘いをなし得るといわれる。そういう
強さの故に獅子と並んで崇拜されたのかも知れない。しかし
三叉の原意は私にはわからない。けれどもシヴ神の武器とし
て知られている。仏教では三宝をあらわすと考えられている
が、どんな事情でそうなつたか知らない。とにかくここでは
三叉を仏教の一つの標章としてとりあげる。それには色々あ
る。三叉だけを単独にあらわすもの(S 6 西)、これにけまんを
配するもの(E 3 南)。開蓮花を中心として、その周囲に四個の
三叉をおく意匠は非常に多い。(E 8 4 内中、E 8 8 外中、S W
7 内中W、2 東中、WN 1 外中、WN 11 内中、WN 12 外中、WN 16
内中)。小さい開れんげの上に三叉をのせて、その左右に咲き
初めの蓮花の側面図を配するものもある。(NE 7 内上、NE
8 内上)。三叉をはさんで左右にれんげ側面図を配するもの。

(WN12内上、下、ES13外上、NE4内上、WN1外上)。三叉と叢生れんげの組合せもある。(SW16内上、NE14外上)。やや変った所では、開蓮花を背景にして三叉の両側に二個の小さい開れんげをおくものが一ヶ所にある。(WN4内上)。三叉上にれんげ、けまんをおくもの(ES15内上)、法輪、三叉、けまん、れんげの組合せ(ES3南)、三叉の上になれんげ、けまん、パルメットがのるもの(NE4内中)、三叉とパルメットとれんげ(NE11内上、SW11外上)。三叉パルメット。(NE12内上)。三叉、パルメット双獅子(SW2内上)。

飛天 半神であるガンダルヴ又はキンナラは人間の姿に鳥の翼をつけて仏を讃え、供物を捧げて飛ぶ。(E3北第2区、WN13外上、N5南)。

礼拝人物像(E3北第2区、S6北、W6東、N1南)

三人の女の像(E4北中) 馬身女体(WN10内中) や馬身男体の奇獣(NE2内中) も仏を礼拝する為にけまんをもつて進む。

重荷を支えるヤクシャ像 アトラス的な役割をなすヤクシャの姿が見える。(N1南、N5南)。

民 衆 の 生 活

象にのる人 家畜としての象にのる人は屢々あらわれる。現在インドで象が野生するのはヒマラヤ山麓と南インドのマイスールの密林であつて、それ以外にあまり象はいないし、家畜としての象も多くない。しかし古代の彫刻に頻出する所を見ると昔はもつと象が多かつた筈で、密林も多かつた様だ。アルタシャーストラに象の産地や象の国家管理のことを述べてある。ここでは象にのつて進む人がかなり多い。(E3北第3区、E5西第3区、SW3内中、WN1内中、WN4内中、WN5外中、WN9内中、WN15外中、N1北下、NE6外中) 象を制御する鈎はSW3内中とN1北下に見える。

騎馬人物像 象に比して馬は少い。騎馬人物はSW14内中、WN13内中にある。馬にのる人物に翼があるのは勿論人間ではなからう。(WN3内中)。獅子の顔をした馬に刀をもつてのる男性もヤクシャ(菓叉)又はラークシャサ(羅刹)の類であらう。(WN11外中)。

駱駝にのる人は一ヶ所(W6北)、駱駝は一ヶ所(SW5外上)にある。又馬面菓叉女(Asvamukhi)が男子を抱えて歩む

姿が見える。(W N 15 内中)。

恐らく人間と思われる者に獅子と戦う男がある。(N 6 南第3区)。彼は盾と短剣をもつて戦う。他に剣をもつ男がある。

男女並立像

西紀以前のテラコッタなどに多い男女並立像はここにも相当数ある。(S 5 東、W 5 南、W 6 西、W 6 北、N 1 北中、N 3 北、N 6 南第1第2区)。それが入口に限られるのは偶然であろうか。これと関連して男が二女を擁して立つ像(E 3 西第1区)や男女の嬉遊する姿(N E 15 外上)もある。後世のもつと露骨なポーズをするミトゥナ像の先蹤であろう。

建築 建築は殆んど見えない。傾斜屋根の木造家屋の切妻(W N 15 外中)、チャイトヤの入口たる拱窓(E 6 東上)が現われる。柱としては獅子のある柱(S 6 北、N 5 西)、獅子をいただし水瓶型の柱礎をもつ柱(E 3 内第2区)、象ののる柱(W 6 東)がある。家具としては籐の腰掛(N E 9 外中)だけである。

動物

象 密林の住者たる象は多くの場合に樹木と共にあらわれる

(E S 11 内中、E S 14 内中、S W 10 内中、S W 9 内中)。そのうち二つの場合に樹木はピッパラ樹である。象だけの場合(S W 5 外中、N E 5 外中)もある。走る象(N E 1 外上)、角があつて馬脚をもつ象の走る姿もある(W N 13 内上)。

獅子 百獣の王としての獅子は非常に多い。何故多いかという、やはり歴史的伝統によると思う。一方にはアッシリヤに始まりイーラーンに伝えられた獅子を主題とする西アジア的伝統がある。又一方インドにも獅子はいる。釈尊が釈迦獅子といわれ、その説法が獅子吼にたとえられるのは、獅子の強さと瑞嚴な容姿によるのであろう。というのは同じく強くとも虎は決してインドの古代記念物に姿を見せない。一頭の獅子は大抵の場合にれんげを背景としてあらわされる。(N E 4 外上、W N 3 外上、E S 7 内上、E S 14 内上、S W 12 内中)。二頭の獅子(W N 16 外上、N 4 東上、N E 13 外上)、三頭の獅子(N E 8 外上)もある。

二頭の獅子が背を合せて外に向つて左右に跳躍する意匠が多い。(E S 西第1区、S 5 東、S 6 北、S 6 西、N 3 北、N 5 西)。これはイーラーンのサーサーン王朝時代の織物に見えるから、イーラーンには古くからあつたのかも知れない。これと

同じ意匠であるが、一對の獅子に翼がある場合がある。(W N 6 中、W N 8 内中)。尚有翼獅子はこの他にもある。(S W 13 外上、W N 4 外中)。有翼獅子は西アジアに発源した。尚この他に嘴のある獅子 (W N 1 内上、N E 2 外上) 嘴と翼のある獅子、(E S 8 内上、N E 9 外上)、あごひげのある獅子 (N E 3 外上) など獅子から着想した奇獣がある。

獅子が他の動物を襲う意匠も西アジア起原であろう。象を襲い (E 2 西)、鹿をくわえ (N E 3 外中)、他の動物を喰う (E 2 西)。獅子に人身がついた奇獣が他の獣をとらえる所もある。(N E 9 内中)。

鹿——鹿は単独には一ヶ所 (N E 9 内上) だが、背を合せて左右に跳躍する所は多い。(E S 4 内上、S 5 東、S 6 西、S 6 北、N 5 西)。

牡牛——牡牛は単独に、(E S 11 外上、S W 9 外上)、二頭で (N E 6 内上)、或いは跳躍する二対として (W 6 東) あらわれる。

馬——馬二頭とピッパラ樹 (E S 13 内上)、獅子の顔をした馬、(S W 14 内中)、馬頭に角あり、魚の尻尾のついたもの (N E 6 内下)。

龍——インドの *nāga* (龍) は毒蛇コブラである。龍はここでは五頭龍しかない。二ヶ所 (E S 5 外中、W N 10 外中) では五頭をもつ蛇身で、一ヶ所 (N E 1 内中) では人身に五龍頭をいいただき、それに蛇身をも現わす。

ガルラ——龍の敵たる *garuda* が蛇を食う所がある (E S 11 内上)。

猪——E 2 東、W N 15 外上。

二獸——E 3 東、N 6 東。

鳥——鳥は大抵の場合一對であらわされる。時にはけまんをくわえ (W N 2 内上)、餌をあさる (W 6 西、S W 6 内上、W 6 北、W N 2 外中、W N 13 外中、N E 1 内上、W N 15 外下)。チャイトヤの屋根に二羽の鳥がとまる。(E 6 東上)、三羽の鳥は W N 9 の内上。孔雀は一ヶ所で羽をひろげる。(N E 5 内中)。

樹木——樹木で名の判明するのは棕櫚の木、(S W 10 内中)、ピッパラ樹 (E S 4 内上、E S 11 内中、E S 13 内上、E S 14 内中)。

文 様

蓮花文 蓮花はサンチー第二塔欄楯の装飾の基本であつて、色々の型があり、殆んどすべての柱にある。特に開れん

げは上下の半メダイオンに多い。

パルメット パルメットはアショーカ石柱にあらわれるものに比すると趣を異にし、羊歯類の葉をおもわす様な多数の線が目立っている。それは蓮花について多く、一々指摘するの煩に堪えない。パルメットが蓮花その他の要素と結びつくことも多い。

連珠文 連珠文はインド人の日常使っている装身具たる胸飾などから出たもので、必らずしも真珠に限らず方形の寶石類やその他の形もあり、同一連珠文に大小や形態も様々である。だからイーラーンのサーサーン王朝時代の様なまろい珠だけではない。(S 6 西、S 6 南、S W 9 内下、S W 11 内中、S W 15 内上、S W 15 内下、S W 15 外中、W N 1 外中、W N 8 外中、W N 9 外中、W N 11 内中、W N 12 外中、N 4 西中、N 6 南、N E 6 外上、N E 7 外中、N E 16 外中)。

三角列文 三角列文はメダイオンでなく方形区劃の周縁の飾りとしてあらわれる。(E S 5 外上、S 6 南、S W 7 内中)。

華鬘 けまんはインド人が日常用いる花環、花綵などから出たもので、礼拝の対象に供物として供え、又荘嚴具として用いる。(E 3 南、E S 6 内上、外上、E S 12 内上、下、E S 15 内上、

外中、S W 3 外上、S W 15 内上、N 5 南、N 6 南、N 6 東、N E 内中)。

銘

文

銘文は柱などを布施した人の簡単な奉納銘が大多数である。それは多くの場合に柱の内面の頂上にある。時には外面の頂上、又時には内面の笠石にある。(E S 8 内上、S W 1 内上、S W 2 内上、S W 9 内上、W 6 東、柱身、W N 内上、W N 10 内笠石、W N 13 内上、W N 16 内上、N 6 南笠石、N E 1 内上、N E 3 内上、N E 5 内上、N E 7 外上、N E 9 内上、N E 11 内上、N E 12 内上、N E 13 内上、N E 15 外上、N E 16 外上)。この時代のブラフミ文字でかかれたプラークリット語である。残念ながら、いまこれを判読する用意がない。